

独自の文化を発信 青文字系カルチャー



中川 悠介氏

アソビシステム株式会社
代表取締役社長

1981年、東京都生まれ。大学在学中からさまざまなイベントを主催し、2007年にアソビシステム株式会社を設立。「青文字系カルチャー」の生みの親。日本独自の文化である「HARAJUKU CULTURE」に焦点をあて、ファッション・音楽・ライフスタイルといった、原宿の街が生み出すコンテンツを成長させ、イベントプロモーションやアーティストマネジメントなどを通じて世界に向け発信している。内閣官房「クールジャパン官民連携プラットフォーム」構成員。

手に職がない自分にも出来るのはみんなが集まる場所を作ること
コミュニティが生まれるイベントを活かした仕事をした
おばあちゃんが信用金庫に頼んで口座開設して
資本金10万円で設立した会社
会社は思ったより簡単に創れるけど会社になるのは大変……

リレー
対談

個性豊かな原宿から カワイイを世界に広めた

好きなことを貫いていかなければ生き続けられない業界で
誰もが好きなことをやれる場所を作りたいと
自分のコンテンツを理解して好きな事やりたい事を貫く
世界標準に合わせるのではなく世界標準を自ら作っていく意識で
やりたい事はオールジャパンでの海外戦略…



小橋 賢児氏

The Human Miracle 株式会社 代表取締役
クリエイティブディレクター

1979年、東京都生まれ。88年に俳優としてデビュー、数多くの人気ドラマに出演。2007年に芸能活動を休止し世界中を旅する。帰国後「ULTRA JAPAN」のクリエイティブディレクターや「STAR ISLAND」の総合プロデューサーを歴任し国内外で成功させる。500機のドローンを使用した夜空のスペクタクルショー「CONTACT」はJACE イベントアワードにて最優秀賞の経済産業大臣賞を受賞。2021年、東京2020パラリンピック競技大会閉会式のショーディレクターを務め、また、2025年日本国際博覧会（大阪・関西万博）の催事企画プロデューサーに就任する。その他、地方創生、都市開発に携わるなど常に時代に新しい価値を提供し続けている。

コンテンツをつくりたい 芸能事務所に転換

小橋 今回、お声かけしたのはアソビシステムの中川悠介さんです。アソビシステムさんは、イベント企画、メディア運営、芸能事務所をしている会社で、タレントのきやりーばみゆばみゆさんが所属していることでも知られています。今日はよろしくお願いします。

中川 こちらこそよろしくお願ひします。

小橋 中川さんと最初に会ったのがいつだったのか具体的には覚えていないのですが、前回登場したドワゴンゴの横澤大輔君とかDリーグのカリスマカンタロー君なども含めて、同世代のプロデューサーの集まりみたいなのを10年ぐらい前からやっていて。

中川 「麒麟危言」ですね。

小橋 コロナ前は月イチぐらいの頻度で集まって、ああでもない、こうでもないと言いながらみんなで楽しむ時もある、それぞれがどこかで沸々とした志と情熱と夢を持っている人たちの集まりです。しかも全員がエンターテインメントと真ん中のチームで、エン



中川悠介氏

ターテインメントで日本をより良くしたいというのが根底にずっとあって。だからと言って、みんなで一緒に仕事をしているというわけではありませんでしたが、今、4代になってそれぞれの特徴が顕著に出てきて、実現性のある個性が出てきたなと思っているところなんです。その中でいち早くというか、かなり時代を創ってきたのが中川君です。特にこの原宿という場所に特化してきやりーばみゆばみゆをはじめ「カワイカルチャー」を世界に広めまして。日本から世界に文化を発信しているという意味では、彼が本当に突出し

ていると思います。我々がそれに感化されるかのようにそれぞれの分野で特色を生かして、ようやく時代的に僕達と一緒にユナイトしてよりいい世界を創れるのではないかな、というタイミングで、このリレー対談がきているんです。

中川 そうですね。

小橋 我々は友達であり仲間であり同士ですが、意外と本当に深い部分やプライベートなことについては普段あまり聞かなくていいですね。それで今日はこの場をお借りしてあえて未知のそういうところを訊いていきたいと思っ

ています。そもそも「カワイイ」とか「原宿」に特化する前に、どうしてエンタメ業界に触れてきたのですか。

中川 そうですね、そもそも自分には手に職がないというか、役者でもないし歌を歌うわけでもない、DJでもないし、スタイリストでもない、と。だけど「みんなで遊ぶ場所をつくりたいな」と思うようになっていたので。そのきっかけとして、ずっとイベントをやっていたのですが、イベントをやっている延長線上でファッションショーとかも実際にやってみました。

小橋 それは学生の時ですか？

中川 ええ、学生イベントでやりました。中学校とか高校の卒業ライブとか、高校時代の夏にバンドを集めてライブを開催したりして、その延長線上でクラブというものを知って、クラブに通ってイベントを開催させてもらったりもしました。周りには美容専門学生とかファッション関係の学生が多かったのですが、その人達を集めてファッションショーもやりました。そういう学生イベントをずっと自分の中で組み立てていたので、その中でもすごく楽しくて人が集まる場所となってコミュニケーションができてくるイベントを

活かして何か仕事にしたいな、と思っ
たのが最初ですね。

小橋 多くの人が学生でイベントを
やっても、殆どが学生レベルのイベン
トで終わってしまいますよね。プロと
して、仕事として、生きていけるよう
になったきっかけみたいなものはあり
ましたか？

中川 高校時代の同級生は専門学校生
が多かったので彼らは2年間、僕は
で2年経って就職する彼等と「将来的
に自分が一緒に組めたらいいな」とい
う考えになったのです。5年くらい前
当時はまだスタートアップもなかった
し、起業するという概念もありません
でしたが、丁度その時に会社法が変
わって「10万円から会社を創れるら
いぞ」みたいなタイミングだったので、
それで10万円で設立した会社が、現在
のアソビシステムです。

小橋 資本金10万円からのスタート
だったのですね。

中川 自分では出来なかったので、お
ばあちゃんが仲のいい信用金庫の人に
頼んで口座を開設してもらって、みた
いな……。

小橋 夢があるなあ！



小橋賢児氏

中川 当時、銀行にも口座を開設させ
てもらえなくてね、信用がないし、ア
ソビシステムという名前が怪しいし、
ましてや資本金10万円などあり得ない
時代でしたから……。その少しあとに
スタートアップブームが始まって、大
学起業家などが生まれてきましたが、
その前はあまりなかったですね。そこ
で自分達でやるしかないな、と。です
から、僕は人に雇われたことがなく
て、サラリーマンというのを1度も経
験したことがありません。そこを貫い
て、将来的にみんなが働ける場所を作
りたかったし、昔はビルを建てたいと

も思っていました。

小橋 ここに、建っているじゃないで
すか。

中川 美容室をやりたい人は美容室
を、カフェをやりたい人はカフェをや
れて、自分が好きな本を読みたい時に
読める本屋があったり、「誰もが好き
なことをやる場所をつくりたい」と
いうのが高校時代からの夢だったので
す。

小橋 高校生の頃からの夢だったので
ですね。

中川 ビルは自社でも何でも、みんな
のやりたいことをやる場所をつくり

たいと思って、高校時代に夢物語とし
て話していたことがありました。それ
を実現したいと思って自分なりに始め
ていって、その内にコンテンツが強い
ことに気がついて、芸能事務所を始め
たいと思ったのがいきさつです。

小橋 「コンテンツが強い」と思った
きっかけは、どんなことでしたか？

中川 僕らはイベントで箱を借りて、
タレントにギャラを払って、DJをし
てもらい、人を呼んでチケットを売っ
て、この利幅でしょう。そうすると、
箱を持つてる人やコンテンツの人も強
いので、そちら側の立場になりたいと、
ずっと思っていました。

小橋 「芸能事務所をつくりたい」と
思っても、それこそコンテンツがなけ
れば芸能事務所はうまくいかないで
しょうか？

中川 最初は自分達のイベントに出て
いた人気読者モデルの子達を、当時は
赤文字系がブームだったので、僕
らは赤文字系ではなくて『Zippe
r』とか『FRUIT'S』のちよつと
個性のあるカワイイ系で、それを「青
文字系」と命名しました。

小橋 ああ、そうでしたか。

中川 当時アメプロで赤文字系がブー

ムだったので、「青文字系読者モデルの人気ブログ」みたいなタイトルをつけてやったら、やはりフォロワーが増えてアクセスが伸びてランキングに入っていたって、始まった感じですね。芸能界は、スタートアップなどあり得ない世界じゃないですか。

小橋 ホント、あり得ないですね。

中川 ですから、そこは無茶苦茶勉強になりました。

小橋 最初は芸能と言っても、モデル事務所みたいな感じだったのですか。

中川 モデル事務所とDJ事務所みたいな感じでした。

小橋 DJのマネジメントをして、自分達のイベントにも出てもらう、というところからですね。

中川 そこからいろいろな企業に知ってもらうためにブログを始めて「こんなに人気があるのですよ」とアピールして、イベントに協賛をしてもらうという様なことをやっていました。

小橋 会社は何人でのスタートでしたか？

中川 スタートは3人です。2年間くらい事務所もなくて、初めて原宿に「出世する」と言われているワンルームを借りて、全員で壁紙を剥がして床を剥が

して、ペンキで白く塗って、お洒落風な事務所にしました。

小橋 原宿にしようと思ったきっかけは何ですか？

中川 当時渋谷がブームでした。渋谷はギャルサークルから大学サークル、クラブまで全て揃っていました。その渋谷の中に入ることより、個性豊かで自由な原宿なら同じことをしなくていいのかな、とっていました。元々カラフルなファッションをはじめ、それぞれが個性を持っていたいい街だということや、自分の中高時代にあった裏原ブームの前からずっとソリッドカルチャーが好きだったので。当時の原宿はGAPがあった程度で、他は古民家ばかりで、裏に住んでいる人が沢山いました。昔のワンルームブティックもそうですが、こういう場所からいろいろなことが生まれてきています。そういう時代からあるカルチャー感みたいなものがすごく好きで「この街でやりたいな」と思ったのがきっかけですね。

小橋 僕は中学校の頃、大田区に住んでいましたが蒲田と大森を抜け出してひとり原宿に来て今、アットコスメのビルの所が昔はテント村で、古着とかアクセサリーを売って

いて、「バイト募集」の張り紙を見つけたて応募したら、「中学生にバイトなんかさせられない」と断られたけど「裏で内職だったらいいよ」と言われて、当時あった「メキシカンクロス」というアクセサリーを袋に入れる1個4円という内職をやりましたよ。それからだんだん店頭や駅前で販売をやったりしました。例えば竹下通りは地方から来る若者達がいいますが、閉店セールを毎日、それを10年やっけても変わらない。

テント村は様々な国の人が交じり合っていて、ブランドショップもある、明治神宮もある、そしてパブルが崩壊したあとに「裏原」というストリートができて、すごく多様な環境の原宿がすごく面白くて、僕の中のベースは原宿にあったのに、ある時に彗星のごとく原宿を名乗る男が出てきて、「待つて待つて。原宿のことは僕の方が知ってるぞ」(笑)と思っていましたね。そんなストリー

トの尖った裏原宿という所から「カワイイ」というのが生まれてきたことに結構ビックリしました。でも実はそこに多様な文化が、たぶんクロスオーバーしていくのですね。

中川 僕らは、裏原でやっていたことの女の子版だと思っています。アイコンがいてそこにカルチャーがあつて、それが好きな人がいて、そこに「外国人」が掛け算されていた時代だったのかな、と思っています。

原宿から世界に発信する「カワイイ」カルチャー

小橋 原宿にオフィスを借りて、その時から今の様な「カワイイ」という感覚があつたのか、そこに根を張っている中でそういうカルチャーが生まれたのか。多分増田セバスチャンさんもうですよね。

中川 初めは『Zipper』とか『FRUITS』のカルチャーから始まって徐々に「カワイイ」に近づいていった感じですね。きゅりーばみゅばみゅは、やはり原宿のアイコンを作ったかったのです。当時はアイドルブームでしたが、アイドルは大人が創り込んだ世界の中の子達で、グループというのがブームだったのですが、そうではなく自分の意志を持っていて、カルチャーもファッションも持っているアイコンを作りたいというのが最初に



きゃりーぱみゅぱみゅ

やっていたんですが「中川がやっていた音楽が大好きだ」と言ってきたのがきっかけといった感じですね。

小橋 自分で場を作ってイベントをやっていなかったら出会わなかった……。

中川 そう、中川にもきゃりーぱみゅぱみゅにも出会っていなかったでしょうね。

小橋 そういう意味では、プロダクションを作る為に人を探したというより、最初に志した「いろんな人が集まる場を作りたい」というところから、どんどん繋がりを広げていったんですね。

中川 そこに人が集まってきた感じですね。社員もそうです。最初に話したように、自分は手に職がないけれど人を集めることはできる、と。人を集めてコミュニケーションが生まれてくることではないのかな、と常に思っています。

小橋 実際、きゃりーぱみゅぱみゅに声をかけたわけですよ。昔、原宿は「スカウトの街」と言われていて、大手芸能事務所なら分かる気がしますが、それ程大手でもない普通に考えたら「ちょっと怪しい」とか「所属す

るなら他の所がいい」とか思いそうなのに、所属することになった要因は何だったのでしょうか。

中川 彼女も原宿が好きだったので、原宿というカルチャーと「自由にできそうだ」と思ったのではないでしょう。当時、彼女が専門学校に進学するかしないかという時で、「駄目だったらもう1回学校に行かせるから」と説得しました。この業界で「絶対に売れる!」とは言いきれませんが、可能性

の確率を上げることはできても絶対はない業界ですから。そうなった時に自分達の可能性として僕達が頑張ること、次のステップで何かできる可能性を増やしていくという発想でしたね。

小橋 その言い方がすごく刺さったんですね。実際、どんな風に仕掛けていったのですか？

中川 無茶苦茶だったなと思います。例えば当時、YouTubeなどでもフル尺のMVを上げるというのはなくて、45秒とか30秒、切っていたのですが、それをフル尺アップしたりして、僕達はテレビのタイアップを取って売る力もなかったもので、とにかく話題を作って興味を持ってもらうことが大事でした。初めて紅白に出た後、翌

年の2月にワールドツアーをしたりして、仕掛けを作って世の中に注目してもらうことを、すごく意識していました。一歩間違えると「色物」に見られてしまうので、自分達の場所を大切にしました。原宿なら原宿で、様々な事をやり尽くしたし、「場所があるというのは強い」と思いましたね。

小橋 先程「自分は手に職がない。だから人を集めることしかできない」とおっしゃいましたが、イベントを作るには、「こういうイベントにしたいか」いわゆるコンセプトが通常ありますよね。そこが、ごちゃ混ぜになっていくと「自分が思っていたのと違う」「このコンテンツ、ちょっと変じゃない?」とか、出てきそうな気がします。そんなことはありませんでしたか？

中川 正直、ありました。ふとした時にやっていることの車輪だけが大きくなってしまつて、自分達が思っている方向に向かっていくのを止められなくなった時に、「このままじゃ駄目だな」と強く思いましたね。

小橋 それまでは、割と多様ないろいろなコンテンツを受け容れられていて、もしかするとそれがすごい強みだったのかもしれないですね。

考えたことで、それに伴って「カワイイ」という言葉をはじめ、いろいろと紐づいてきた感じですね。

小橋 彼女との出会いはどの様な感じでしたか？

中川 僕らが主催していたファッションショーの中で、高校生版のショーのMCを担当していました。mixiを2つ持っていたりして面白い子だなと思っていました。それまでの原宿系の読者モデルは、そんなにやる気もなく時間も守らない、学生時代のバイトに近い感覚で、繋ぎの仕事でしたが、彼女はモチベーションもあつたしすごく真面目でした。当時、アーティストの中田ヤスタカ氏とイベントを一緒に

中川 結局自分達がルールになってしまっていて、無茶苦茶だったと思えます。当時、その無茶苦茶なことを応援してくれる先輩がいて、それがちよつと大きくなると応援だけではなく、ビジネスの人達が寄ってきて、その瞬間に何かひとつ崩れる……バランスつてね。それで次にどうなっていくのだからと悩んだ記憶がありますね。

小橋 ある意味で、すごくいい子もいるけど時には下素人みたいな子もいて、「この後にこのアーティストはないだろう」とか「このコンテンツないだろう」とか、そこを見られる許容があったのですか。

中川 そこは自分達の中であつたと思えますね。

小橋 僕はすごく気になってしまふから逆にひとつの色になっていく。でも、本当にいい意味でごちゃ混ぜにするのとで、そのカオスの中から生まれてくるケミストリーで新しいものが誕生することもありますね。

中川 それも結構ありました。

小橋 きゃりーばみゅばみゅを見ていて、アンビシステムがやってきていること、今のタレントのバランスも含めて唯一無二になってきている気がしま

す。外国かぶれではない日本から世界に羽ばたいていくような世界観になっている。

中川 すごく意識したのは、やはり王道では勝てなかつたのです、先輩達に。僕達だから分かること、好きなことを貫かないとこの業界で生き続けていくのは難しいと感じたことはありました。

小橋 刺激を受けた先輩なのか、業界なのか、「こういう所を目指そう」と指標になつたことはありますか？

中川 いろいろな先輩方を見て、自分のコンテンツのことを理解している人がすごく多かつたので、そこが一番大切なだと思っていました。自分が理解できないことはできないと思つたので、やはり自分が好きなことやりたいことに集中していきました。更には、社員スタッフが理解できることを貫いていくということですね。

小橋 逆に僕はスタッフも理解できないことを貫いて、みんなが引いていくみたいな感じです。

中川 八百屋ではないのです。新鮮な野菜を仕入れて売るだけが芸能界ではないと思うので、そこは変わつていかないとはいけませんし。

小橋 僕は芸能界にいたからすごくわかります。中川さんの年で、ある程度「芸能界」という構図が出来上がっている中で、芸能界に飛び込むのは大変なことですよ。プロダクションをやるのは、全く簡単ではないと思うのです。もちろん最初はそんなことを知らずに入つたと思うのですが、実際、足を突っ込んでみてどうですか？

中川 スタートアップ界隈ではないので……。でも、「売れた者勝ち」的な部分もあるし、やはりこの仕事に愛情を持つているということは大切だと日に日に強く感じるようになりましたね。だから今では周りの先輩方も大好きですし、話していて勉強になります。自分達もちゃんと続いてきているこの業界を次の世代にどういう形でパトナツツするかみたいなことを、すごく考えるようになりました。

小橋 新しい学校のリーダーズや、きゃりーぱみゅぱみゅも含めて、日本を飛び越えて世界に影響を及ぼすようなアーティストがどんどん生まれてきていますね。志してそうなつていったのか、それとも自然の流れで導かれていつているのか……。

中川 勿論志していましたし海外に行



新しい学校のリーダーズ

きたい、とは強く思っていました。根本の理由は、原宿は外国の人がとても好きな街ですよ。どうしてこんなに日本の原宿が好きなのか、とずっとこの街にいて思っていました。それなら海外のことを真似する必要もなく、僕達がやっていることを発信できるので、と。勿論ジャパニーズオリジナルで日本のコンテンツを発信することがすごく大切だと思いはいまました。

小橋 一方で、言語の問題もある。韓流とか横ばいって聞いたら、日本はままだまイケてないもどかしさがあるの

か、もしくはまだまだチャンスが無茶苦茶あると思っているのか、どちらですか。

中川 もどかしさがすごくあります。この10年間、きやりーばみゅばみゅのデビューからずっとやってきました。10年前は韓国ではすごく小さくて人もいなくて、でも様々な事務所と企業が集まってやっていてその当時、僕はライブハウスを観客でパンパンにしていたので「あ、すごいな、頑張ってるな」程度の気持ちでしたが、10年経ってそれが逆転した時に、やはり日本はクリエイティブティやものづくりに長けているのが沢山あると思います。それを発信するということは又別で、そこが上手くないのかなと思いますね。

小橋 やはり発信力でしょうか。

中川 そうですね、もどかしさはずっとありましたが、今、すごいチャンスだなと思っているのは、日本人がものづくりに長けているみたいなどころと、この先の未来に対して大きな可能性がある、というのはいすごく感じます。自信を持って。

小橋 昔の日本というか、芸能事務所やタレントもある程度、形や枠組み

で成り立っていましたが、たまたまま拘っていた面白いものを世界の人「面白い」と言う時はありましたが、あまり外側を向いていなかったのではないのでしょうか。でも、今の「新しい学校のリーダーズ」や若い世代の人達、既にSNSで世界と繋がっているのがデフォルトですから、世界からどう見られるか、世界にどう伝えるかというのを最初から考えて作っている気がしますね。

中川 今で言えば、ブログから始まり、ツイッター、インスタグラム、TikTok、YouTube になっていきます。昔は言葉でしたが、写真でアピールできて、次に動画になって、言葉はますます要らなくなっています。よりグローバルなサービスだし、そうなるどどこにヒットのチャンスがあるか分かります。最近、言語はまだ関係はあると思いますが、国境は関係ないと思うのです。でもコンテンツは更にグローバルに出すために国は関係ないとすごく感じます。そこが変わってきていますね。

オールジャパンのワンチーム

世界に日本を知らしめる

小橋 芸能界のスタートアップ的に、芸能界のしきたりとは全く違うところからカルチャーが生まれていって、今、芸能界でも新しい風を吹かせていると思います。そういった中でこの麒麟児のメンバーも含めて、同世代でそれぞれ面白い人達が出てきたりする景色が見えてきた時に、現状をどう思っているのか、ここからやっていきたいことは何か聞かせていただけますか？

中川 僕がずっとやりたかったことで、今もそう思っているのは、オールジャパンでの海外戦略です。それはエントメ業界のコンテンツもそうだし、例えば企業ものづくりをしている人も、政府も、本当の意味で「食」もそうだし、日本のコンテンツを世界に売るといふことをすごくやりたいです。今までバラバラだったものが、全員でワンチームになることはとても大切だと思います。

小橋 そう、本当に同感です。これまでも「日本のコンテンツを出そう」と言っても、皆で本当に実践しているプレイヤーが繋がって、というより、どこかの企業がそういうコンセプトを作り上げて、無理矢理すく上げて作って世

に出していくだけでした。実践をしてきた人たちがそこにいない状態で作られていたことが多かったのですが、他の国を見てみると、強いのは世界に行って仲間意識というか談合意識で戦っている、でも日本は海外に行っても、まだ競い合って落とし合うようなところがあります。それが僕らの世代になって、ようやく少しずつ繋がってきてひとつになれる気がしています。

中川 僕もワンチームになれる気がしますね。

小橋 ワンチームになる実績と共に実力もついてきていますから。しかも、先程おっしゃっていたように先輩もリスクペクトしながら、逆に僕達若い世代も多分リスクペクトしているというか。僕達は、アナログとデジタルの融合の時代に生まれて、アナログからデジタルが変わっていく時代も「失われた10年」の様な時代も生きたけれど、エントメ業界からするとすごい氷河期みたいな時代で、なかなか出るのが苦しかったですね。上は上ですがいい力を持って活躍している下の世代などはバーン

と僕らを追い抜いて行ってしまうし……。「ようやく僕らの時代がきた」と思ったら「若手支援します」みたいな時代にきて苦しかった分、逆に両方の良さを繋いでいけるところはあると思う。このリレー対談もそうですが、これから一緒に繋がっていくといいな、という思いもあります。そういう意味で言うと、僕は今、万博に関わって万博というきっかけによって、もしかしたら仲間の力を集結できるいいチャンスでもあるのではないかなと思っています。一見すると世界は分断して、AIみたいなものが台頭してきて、日本もある意味様々な膿が出てきている、こういう時代の景色はエンタメ業界からするとどんな風に見えるのでしょうか。

中川 当たり前だったことが当たり前ではなくなっている時代だと思いますね。その中で自分達はどう生きるかを考えると、僕達にしか出来ないことをやってきたという自負があるから、逆に言うとAIが来ようが何が来ようが、それはパートナーであり仲間になっていくのかな、という感じでライバルだとは思って

いませんね。使う価値があつてお互いがうまく共存し合つて使っていくことはあるという考え方はありますが、日本全体としては先程おっしゃったように、内需だけで食べていた時代というのが当たり前でしたが、それが崩れてきたことが世界に行く一番の理由であり原動力だと思います。そこは自分達も伸ばしていきたい、とは思いますが。それに、僕達世代にとつて海外は憧れではなく、海外をちゃんと知るべきです。昔の日本では海外は憧れで、海外に対してすごいリスペクトがあつて、ファッションならパリ、音楽ならロンドンというのがありました。そういうことではなく、ちゃんとリスペクトした上で、自分達はそこをどう使うかということを考える時代になっています。今までのような歪が無くなつてきているように感じますね。WBCで大谷翔平選手も「憧れを捨てて超えよう」と言っていましたよ。

小橋 世界標準に合わせるのではなく、世界の標準を自分達で作っていくという可能性もありますよね。その意識を持つか持たないかがすごく大事な

気がしますね。

中川 そこに意識を持たないと、当たり前になつてしましますからね。

小橋 学生時代からイベントが好きだったというお話しでしたが、それよりもっと前、子どもの頃はどうか。お祭りが好きだったとか……。

中川 やはり学園祭とかが大好きでしたね。とにかく人が集まるのが大好きで、大学時代はイベントをやりながらテニスサークルもやって、そちらも120人程集めましたよ。

小橋 人集めの天才ですね。

中川 人集めしかできませんけれど。

小橋 人を集めるのは大変ですよ。僕は人を集める場所は作ってきましたが、実は人見知りです。中川さんは人見知りはないですか？

中川 僕はあまりないですね。**小橋** これまでやってこられて何か苦労したことはありませんか？ もしあれば、この機会にお聞かせください。

中川 今でもまだ苦労しています。本場にサラリーマンの経験がないまま会社を始めて、仲間で作ってきたので、仲間のサークルつばさから会社になるタイミングがすこ

く難しく、僕はまだ慣れていない状態なのだと思います。けどそこでついてこれなくなつて去っていく仲間や、新しく入った人がそこに入り込めずに辞めていってしまうとか、そんな経験はやはり辛かったですね。

小橋 今はある程度落ち着かれましたか？

中川 そうですね、でもまだまだこれからだと思えます。

小橋 イベントをやるのと社長業は別物で、また違いますからね。

中川 会社というのは、本当に生き物なのだとつくづく思います。

小橋 経営を考えるとやりたいことが出来なかつたり……。

中川 それもそうですし、今までは直接言ったことも直接ではない方がいいこともあつたりして。僕は、今言いたい人なので「おい！」と。でもそれは駄目だ、というのも勉強になりました。

小橋 サポート役のような方はいらっ

しゃいますか？
中川 はい、勿論です。でも会社というのは、思ったより創れてしまうものだというのが半分、そして本当に会社



対談を終えて

中川 前回登場した横澤大輔君と初めて会った時に、生年月日が全く同じだということが分かって。更にいろいろ話をしている内に共通の知り合いがどんどん出て来て、その日に共通の友人をいっぱい呼んで始まったのが麒麟児会ですからね。

小橋 そもそもふたりはどこで出会ったのですか？

中川 羽田空港の国際線のチェックイン

カウンターだったか出国審査だったかで並んでいたら、彼が前にいて。

小橋 運命、すごい出会いですね。

中川 それで話をしていたら、誕生日が同じだということが分かって、「ご飯を」となって……行先は別々だったのですが、そこからのスタートでしたね。

小橋 オールジャパンでワンチームになってやっていくこうとしている構想についてはどんな感じですか？

中川 夢物語はいろいろ話しています。みんなでひとつの事を作り上げるようなことをやりたいよね、と。

小橋 コンテンツとしてはもう十分それぞれにあるのですが、今はバラバラなのですね。先程も言いましたが僕達だけではなく、上の世代も下の世代も繋ぐことが出来ると思っているの、どちらも繋いでいきたいなと。一見、相反するぐちゃぐちゃなものを結んだり、和合したり、そして調和できるというのが日本の得意分野でもあると思っっています。もしかしたらそのワンチームの中は、別に日本コンテンツだけではなくてもいいと思います。アジアかもしれないし、どこか他の国かもしれないませんが、それらを混ぜても「何

故だか、この感じは日本だよ」と言えるようなものを、何となく感覚として自分達で創れるのではないかな、と思っっています。否定ではないのですが、取って付けたような「クールジャパン」とか、日本と言えは寿司、歌舞伎、何とかとセグメントして分けるのではなくてね。僕が最近思うのは、日本の美は時間をかけて美しくなったもの、要は伝統的なものもあるのですが、短い時間の中であらゆるものを調和していく、ミックスカルチャーしていくものもあるのではないかなと。きゅりーばみゅはみゅが生まれてきたのもまさにそうですね。ものすごいスピードの中で様々な人達が入り組んで、カオスの状態から生まれてきた新しいコンテンツ。この「美」というものに興味を持っている人達が世界中に沢山いると思っっています。

中川 その感覚を繋ぐことが出来るのが僕達の役目だと強く思っっていますね。

小橋 ぜひ実現に向けてやっていきましょう。今日はどうもありがとうございます。

中川 こちらこそありがとうございます。

になっていくのは大変だ、というのが半分です。自分達のはまだ会社になっ
ていないと思っいます。

小橋 子どもと同じですね。

中川 そうですね。多分、育っている過程だと思っいますね……。

小橋 楽しみも沢山あると思っいます
が、これからは麒麟児会のみんなで力を合せてひとつになって、世界に行

くという構想も是非実現したいですね。本当にそういうタイミングだとも思っいます。

中川 この対談もそういうタイミングですし、今年になって急に「みんなで食事をしようよ」ということになって
いましたから。

小橋 そうすると、麒麟児会も12、13人になってるし、具体的な目標もできてきますよね。

くという構想も是非実現したいですね。本当にそういうタイミングだとも思っいます。

中川 この対談もそういうタイミングですし、今年になって急に「みんなで食事をしようよ」ということになって
いましたから。

小橋 そうすると、麒麟児会も12、13人になってるし、具体的な目標もできてきますよね。